

青橋商店  
AOHASHI NOVELS



穢  
れた  
エルフ  
女王

マリナ

成人向け  
ADULT ONLY

青橋由高  
安藤智也  
illustration

## Story

母アイシャから美貌を受け継いだ第一王女マリナ。

美しく、気高く、清楚なエルフの姫。

しかし、人には言えない秘密があった。

「お父様……レオンお父様……！」

エルフ王国の英雄である父レオンに対して向けられるマリナの

まなざしは、血の繋がった娘のものではなく、

恋する乙女のそれだった。

「レオン様の名を口にしながら独り遊びで浅ましく果てる、

そんなお姿を知られてもよろしいのですか？」

母アイシャ、妹ミスに続いて狡猾な人間の魔術師ギユネイが狙う最後の標的マリナ。

その姦計に嵌まり、弱みを握られてしまう処女姫に次々と

襲いかかる淫らな責め苦。

「この無礼者！ わたくしに近づかないで！」

唇と純潔だけは守り通そうと悪夢のような日々耐えるマリナ

だったが、もう一つの穴を執拗に罅られ、清い女体は徐々に

淫欲の沼に沈んでいく。

「助けてお父様！

わたくし、このままだと恥を掻いてしまいます！」

意志とは関係なく躰けられるアヌスに続き、ギユネイの魔の手はついにマリナの処女へと伸びて……。

「マリナ 穢されたエルフ王女」

青橋由高あおはしゆたか（著）  
安藤智也あんどうともや（イラスト）

目次

|            |     |
|------------|-----|
| 初日         | 6   |
| 二日目        | 26  |
| 十日目        | 39  |
| 十五日目       | 64  |
| 二十日目       | 74  |
| 二十五日目      | 82  |
| 二十八日目      | 103 |
| 三十三日目      | 142 |
| オリジナル版あとがき | 145 |
| 電子版あとがき    | 148 |

人間族の身でありながらエルフ王国の軍師という要職に就いているギュネイは、レオン王からの直接の命を受け、秘密裏に城を出た。

(ふふふ、思っていたとおりの展開すぎて、逆に怖いくらいですね)

馬車を飛ばして数日後、目的地である隣国に到着したギュネイは、口元に浮かぶ笑みを押し殺すのに苦戦していた。

(こここのところの私はちょっと運がよすぎます。人の運の総量は決められているとも言いますから、そのうちしっぺ返しを食らいそうです)

たとえそうなったとしても、それならそれでかまわないとギュネイは思っていた。(私もすでに四十を超えましたし、いくら魔法を駆使してもここから先は衰えていく一方です。間違いなく、ろくでもない死に方をするでしょうしね)

ギュネイを乗せた馬車は国境を通過すると、とある有力貴族の屋敷へと向かう。

裏門から入り、黒ローブで全身を隠して素早く屋敷の中に入ったのは、人目を避けるためだ。

(いるはずもない架空の襲撃者に見つからないようにこのような真似をするとは、我

ながら滑稽の極みです)

ギユネイがレオン王から命じられたのは、親善大使として各国を回っている第一王女、マリナの護衛だった。

きっかけは、マリナが何度も魔法と思しき攻撃を受けた、という報告がレオンの元に届いたことだ。

幸い攻撃はマリナには当たらず、今のところは護衛の者たちが軽傷を負っただけだが、父親であるレオン王を不安にさせるには充分だった。

(マリナ様がああ警告に脅えて帰国する可能性も考えてましたが、さすがアイシャ様の娘ですね)

レオンは政務をいったん切り上げて国に戻るよう何度も説得したらしいが、マリナは王族としての仕事を途中で放り出せないと、首を縦に振らなかったという。

(気高く、貴いそのお心もアイシャ様とそっくりです。……おっと、こんな顔で謁見したらまずいですね)

マリナが滞在している屋敷に入ったギユネイは、窓に映った己の邪悪な顔に気づき、慌てて偽りの表情を作り直す。

(まあ、この程度でどうこうできるような容姿ではないですが)

ギユネイは立ち止まり、改めて自分の姿を眺める。

エルフの中ではもちろんのこと、人間族としても高いとは言えない身長。

魔術師とは思えないほどに鍛え上げられた肉体のせいでずんぐりむっくりとした印象がさらに強くなる。

愛想笑い程度ではまったく誤魔化せない、鋭い目つき。

そして、見事な禿頭。

(我ながら陰気な顔です)

「ギユネイ様？ なにか気になることでもございましたか？」

案内してくれていた老執事が、訝しげに振り返る。

「いえ、なんでもありません。……マリナ様はどちらに？」

「この先のお部屋でございます」

「申し訳ないですが、私とマリナ様だけにしていただけですか？ 我が王から内密の

手紙を預かっておりますので」

「承知しました。では、なにかございましたらお呼びくださいませ」

深々と腰を折って音もなく下がった執事の後ろ姿が完全に見えなくなってから、ギユネイはマリナの部屋をノックした。

「どなた？」

「エルフ王国軍師、ギユネイでございます、マリナ様」

「……………」

分厚いドア越しでも、王女が自分を歓迎していない空気は感じられた。

(これも予想の範疇ですけど、だからといって嬉しくもないですね)

まるで剣士のように大きく盛り上がった肩をすくめ、中年魔術師は苦笑を浮かべる。

「レオン様からの手紙を預かっております」

「お、お父様からの？ は、入りなさい、ギユネイ」

(おやおや、こちらへんは相変わらずですか。そうでないと私の計画が狂うので助かりますが)

入室したギユネイは先程の老執事に負けないくらいに深く頭を下げつつ、素早く部屋を観察する。

(一応、魔法攻撃への対処は施してありますね。私から見れば兇戯みたいな結果ですが)

国賓級の来客に相応しい立派な部屋と、四隅に張られた稚拙な魔法結界の対比に、ギユネイの口元がニヒルに歪む。

もともと、超一流の魔術師であるギユネイからすれば、たいていの魔法は大したことがなく見えてしまうのだが。

「お久しぶりでございますマリナ様」



「そうですか？ あなたに高熱の治療をしてもらったのはつい最近だと思いましたが、れど。……ああ、人間のあなたとわたくしたちとでは時間の感覚が異なるのでしたね」

何気ないセリフのようでいて、自分たちよりも遙かに早く寿命を迎える人間への侮蔑が感じられた。

こういった傾向はエルフ族全般に見られるものだし、長くそういった中で暮らしてきたギユネイにとっては今さらなので、特に気にならない。

ただ、マリナのそれは一般的なエルフの嫌悪感よりも強かったが。

(ずいぶんと警戒されてますね。なかなか勘の鋭いお方だ)

第一王女のマリナは、エルフ王国の至宝、生ける宝石と賞賛される美貌の母親、アイシャの容姿を色濃く受け継いでいる。

妹で第二王女のミスとは異なり、性格もアイシャに近い。

つまり、幼い頃からアイシャに歪んだ愛情と欲望を抱くギユネイにとって、目の前の王女は格好のターゲットなのだ。

髪の色こそ違いますが、瞳の色や顔立ち、スタイルなどは母とそっくりだ。

なにより、その佇まいから発せられる高貴なオーラがギユネイの昏い情熱を激しく、狂おしいほどに刺激してくる。

「しばらくお目にかからないうちに、また美しくなられましたね。私のような下賤の者には、マリナ様のお姿に目が眩みます」

「お世辞は結構です」

性別種族を問わず、近隣各国にファンを急速に増やしている親善大使の美女がこういったつっけんどんな態度を取ることは珍しい。

(マリナ様に冷たくあしらわれるのも、これはこれで悪くありませんがね)

たとえネガティブな意味合いであっても、初恋相手と瓜二つの娘に特別扱いされることは決して嫌ではなかった。

これから自分への態度がどのように変わっていくかを想像するだけで、中年男の歪んだ肉欲が熱を帯びていく。

「私はお世辞が苦手なのですが。……アイシャ様からは美しさを、レオン王からは気高さを受け継がれたマリナ様は、まさに我が国の宝でございます」

「あなたは、わたくしに世辞を使うためにここまで来たわけではないのでしょうか？」

マリナの表情が僅かに、けれど確かに緩んだのをギュネイは見逃さなかった。

(アイシャ様に似てるって言われるのは大して嬉しくなくとも、レオン王を引き合いに出されると喜ばれるのですね)

幼い頃から将来を嘱望されてきたマリナは、冷静で理知的な性格だと周囲から思わ

れている。国の親善大使として各地を回り続けてる経験もその傾向に拍車をかけたと言えるだろう。

しかし、マリナはエルフ族としてはまだまだ子供、少女として扱われる年齢だ。

思春期の肉体の成長速度は人間とそう変わらないため、外見は立派に育っている。が、長い寿命ゆえに精神面の成熟スピードがゆっくりのエルフなので、どうしても人間のギユネイから見ると幼さも感じられるのだ。

（まあ、アイシャ様も人妻で母親にしては少々、少女っぽいところがありますが）  
無論、そういったアンバランスさもギユネイの目には魅力的に映る。

「私はレオン王から直接の命を受けてここに馳せ参じました。何者からの襲撃からマリナ様を警護しろ、とのことですよ」

「お父様が……」

父親が自分を心配してくれたことが嬉しいのだろう、マリナの透き通るような白い肌に赤みが差す。

母アイシャの後継を周囲から求め続けられた反動か、マリナが父レオンに対して強い感情を抱くようになったことに、ギユネイは以前から気づいていた。

「はい。これは国からの正式な命令ではなく、あくまでもレオン様の私的な、個人的な頼み、と考えてもらって結構ですよ」

ギユネイはレオンの名を繰り返し口にして、ファザコン王女の心を揺さぶる。

「それだけレオン様はあなたのことを想っていらっしゃるということですよ」

「お父様がわたくしのことを想って……？」

当人にその自覚はないのだろうか、熱くなつた頬を両手で隠すような仕草は、まさに恋する乙女そのものだった。

「レオン王はこうもおっしゃってました。できるならばマリナ様には早急に国に戻つてもらいたいと」

「……」

マリナの心がぐらりと動いたのを確認してから、ギユネイは続けて言う。

「アイシャ様も同じく心配されておられました。たまには国に戻ったらどうかと」

「お母様が、ですか」

アイシャの名を出された途端、その母親と似た美しい顔が僅かに強張つたのをギユネイは見逃さなかつた。

(レオン王への思慕が強い分、アイシャ様への対抗意識もあるようですね。これはのちのち利用できそうです)

本人は夢にも思つてないだろうが、マリナの深層意識では大好きな父親の妻であるアイシャにライバル意識がある、というのがギユネイの見立てだ。一人の女として母

親を見ているのだ。

「……いえ、わたくしは国の代表として各地を回っているのです。心卑しき者に命を狙われることも覚悟の上です」

かつて、今のマリナ同様に各地を大使として回っていた母への対抗意識か、帰国するつもりはないと首を横に振る。

マリナは自分の意志でそう言ったつもりだろうが、両親への感情を巧みに利用されたことには気づけない。

（以前よりもさらにお二人への想いがよくも悪くも強くなってますね。私にとっては好都合です）

「さすがはレオン王の血を引かれるマリナ様です。あの方も、どのような困難や強敵が立ちはだかつて、常に勇猛果敢に前を向いておられました」

マリナの歓心を買うためにレオンを持ち上げつつ、自分の好感度もアップさせるための言葉を口にする。

「ああ、あなたはお父様とともに旅をされたのでしたね」

期待どおりにマリナがこの話題に食いつく。好きな相手の過去を知りたいと思うのは種族を問わず変わらないのだ。

「ええ。もしマリナ様がご所望されるのでしたら、レオン王にお仕えして旅をしてい

たときの昔話をさせていただきますが」

見え見えの釣り針に、マリナの瞳が輝く。

「しかし、まずはマリナ様の身の安全を確保するのが先決でございます。レオン王の武勇伝はそのあとで、ということでもよろしいでしょうか？」

レオンの昔話を餌にまんまと王女の警戒心を緩めることに成功したギュネイは、まずは信頼を勝ち得るために努めて事務的な態度で事情聴取を始めた。いつ、どこで、どのような攻撃を受けたのか、淡々と、しかし子細にマリナから聞き出した。

マリナはもう何度も同じ説明をしてきたせいだろう、途中、面倒そうな素振りも若干見られたが、ギュネイは気づかぬふりをして続けた。

(そろそろいいでしょう)

マリナの苛立ちが限界に近づいたのを見て、ギュネイはタイミングよく事情聴取を切り上げた。相手の反応を見極めるのは、ギュネイの得意とするところでもある。

「わかりました。長々とお手間を取らせて申し訳ありませんでした。これで敵への対策を講じられましょう」

本気で敵の攻撃を封じるつもりであればまだまだまだ情報が足りなかったが、ギュネイ

にその必要はなかった。なにしろ、マリナへの魔法による攻撃を仕掛けていた敵とは、ギユネイ自身だったからだ。

マリナとその周囲に魔法による攻撃を繰り返せば、当然、娘を溺愛しているレオンは自分を頼るといふ計算があった。

(私が本気で暗殺を企てるなら、そもそも魔法を使った証拠すら残しません)

露骨に魔法の痕跡を残したのは、スペンチャリストである自分にレオンが娘の保護を依頼するだろうと踏まえてのことだ。

先程の老執事が用意してくれていた茶で唇と喉を潤してから、ギユネイはレオンとの旅の日々を語り始めた。

マリナが望んでいるであろうエルフ王の勇姿を、記憶を辿りながら話していく。

幸い、レオンのエピソードには事欠かないので、そういう意味では楽だった。

(こうして思い出してみますと、ずいぶんと色々な冒険をしてきたのですね、私も) 昔話をするたびに当時の思い出が蘇り、懐かしい気分になる。

長寿のレオンにとっては短い旅だったかもしれないが、ギユネイにとっては間違いなく人生最大の冒険だった。

(いけませんね、歳を取ると感傷に浸りやすくなつて)

知らず浮かんでいた自嘲の笑みにマリナが気づいた。

「どうかしましたか、ギュネイ」

「えっ……ああ、いえ、話しているうちにあれこれ懐かしい気分になりました。私のような寿命の短い者にとっては、間違いなくあの旅こそが青春でしたので」

このセリフはギュネイの偽らざる本心だったが、口にしてから少しだけ気恥ずかしくもなる。

そんなギュネイの心の動きを察知したのだろう、マリナの瞳が僅かに和らぐ。

「あなたにもそのような感情があるんですね。少し……少しだけ、驚きました」

言ってから、しまった、という顔になったが、それでもだいぶ警戒心が薄れてきたのがギュネイにはわかった。

けれど、ここで調子に乗ってはならないと自分に言い聞かせる。

「さて、そろそろ私はこの屋敷に魔法の防御壁を設置してまいります」

「え」

敬愛する父親の冒険譚をもっと聞きたかったのだろう、マリナがまるでおもちゃを取り上げられた子供のように眉根を寄せる。

そんな表情はどこか愉悦を堪えるときの女の貌にも似ていて、ギュネイの中の獣欲を刺激してくる。

「話しているうちに色々と思い出して今日は実に楽しかったです。もしマリナ様がよ



ろしければ、ですが、また明日も昔話をさせてもらっても？」

「え、ええ、そうですね、どうせわたくしの公務はしばらく中止ですから、付き合うことに異論はありませんわ」

必死に喜びを隠そうとするマリナの姿に、ギユネイもまた、邪悪な笑みを隠すのが大変だった。

「ああ、忘れておりました。レオン王からこれを託されておりました」

たった今思い出したような顔で二つの水晶玉を手渡し使い方を教えてから、ギユネイはマリナの部屋をあとにした。

(初日としてはほぼ満点の仕込み、ですかね)

薄気味悪い人間の魔術師が立ち去るとすぐに、マリナは渡された水晶玉を言われたとおりの場所に設置した。

(ええと、こちらを寝室に置くのでしたわね)

就寝時という、最も無防備な瞬間を守るためと言われた水晶玉をベッドの傍らに置くと、マリナはいそいそと客間へと戻った。

もう一つの水晶玉をテーブルの中央に置き、その不思議な色に輝く球体を覗き込む。

(手をかざすと、お父様のお姿が映るだなんて……本当かしら?)

あまり魔法には詳しくないマリナは半信半疑だったが、ギユネイの指示どおりに手をかざすと、水晶にゆらゆらと波のような模様が浮かび始め、それが次第に映像になっていった。

(お父様!)

手のひらに乗る大きさの球体の中に、確かに父レオンの姿があった。

『マリナ、聞こえているか?』

映像に加えて音声まで聞こえてきたことに驚く。同時に、これだけの魔法を使えるギユネイの力量を思い知らされた。

だが、今はとにかく敬愛する父の美しい姿と、自分に向けられる声に全神経を傾ける。

(ああ、お父様、なんてお美しい……)

水晶に映る英雄王レオンの逞しく、凛々しく、そして気高い姿に、マリナはほう、とため息を吐いた。

レオンの発する言葉は故郷を離れた我が子を気遣うもので、特別なメッセージはなにもなかったが、マリナには充分だった。充分すぎた。

「……お母様?」

途中から母アイシャも映像に現れた。

美しい母もレオンと同じように娘を気遣う言葉を水晶の中からかけてくれたが、父の声ほどマリナの心には響いてこない。むしろ、レオンの手が妻の肩に回されていることのほうが長女には気になった。

実の母親に嫉妬しているという自覚は、マリナにはない。

(お母様、どうしてこちらをちらちら見ているのかしら?)

普段どおり、王にふさわしい威厳を見せる父に比べて、映像の中の母はどこか不安そうに感じられた。だが、母の瞳には不安のみならず、どこか妖しい期待も含まれることにマリナは気づけない。

このときのマリナは父の姿に意識を奪われるあまり、この魔法の映像を撮影している者の存在を失念していたのだ。

もっとも、自分の母親がなにに気を取られているかをこの時点で知ったとしても、マリナにできることはほとんどなにもなかったのも事実である。

『それではマリナ、私たちの可愛い娘よ、また会える日を楽しみにしているよ』

(あっ、レオンお父様!)

映像の再生が終わり水晶が元の姿を取り戻したのを見て、マリナは寂しげに息を吐く。久しぶりに父の姿を見られた嬉しさの大きさはそのまま、喪失感の大きさにも繋

がる。

マリナは無意識のうちに水晶に手を伸ばし、もう一度最初から映像を再生させた。  
『マリナ、聞こえているか？』

「はい、お父様……！」

水晶の前で手を組み、瞬きすら忘れたように実父を見つめる美しい王女の表情は、まさに恋する乙女そのものだった。

マリナは生まれたときから両親の、そして国民の期待と寵愛を一身に受けて育った。エルフ族の英雄である父レオンと、他国との外交すら左右するとまで称される母アイシャからそれぞれ気品や美貌を受け継いだマリナであったが、その分、有形無形のプレッシャーに晒され続ける人生を余儀なくされる。

幸か不幸か、マリナには父と母から伝えられた才覚があった。

周囲の期待に応えられるだけのポテンシャルが備わっていた。

だが、それは常にぎりぎりです。どうにかクリアできていたラインでもあった。

（お父様……わたくし、本当は国に帰りたいと思ってたんです。怖いのです。常に気を張っていないければならない今の生活が、つらくて苦しくてたまらないのです）

この日の夜、マリナはベッドに入ってもなお、水晶玉に映る父の姿に見入っていた。もう何十回再生したかわからないほどだ。

(でも、お父様とお母様の……いいえ、レオンお父様のご期待を裏切りたくなくて、わたくしは、マリナは頑張ってきました)

ここまでどうにか堪えてきたものが、父親の姿を目にしたことで一気に心の奥から流れ出ていくのが自分でもわかる。

弱音を吐いてはいけない、ここで気を緩めたら一気に崩れてしまうと理性は警告を発するが、エルフとしてはまだまだ年若い、経験不足の少女にそれを望むのは酷すぎた。

「お父様……お父様……あ」

誰もいない部屋のベッドで一人、孤独な王女は嗚咽を漏らした。

誰もいない、暗い部屋でたった一人で枕を涙で濡らした。

もし、自分が長女でなく次女であれば、妹のミスと立場が逆であればこんなにも苦しまなくて済んだのだろうか、などと考えてしまう己の情けなさに、また新たな涙が溢れてしまう。

「うっ……うっ……うっ……うっ……」

弱り切った心を慰めるためにまた水晶に手をかざしたマリナは、

「え？ これは、なに……？」

見たことのない映像に充血した瞳を瞬かせた。

水晶玉の中に見えるのは敬愛する父レオンの姿だが、これまでとは違う映像が流れてくる。

『これでよかったのかい、ギユネイ』

『ええ、マリナ様への愛情が溢れる、素晴らしいお言葉でした』

(ギユネイ？……ああ、そうですね、魔法でお父様のお姿をこの水晶に封じ込めたのはあの人間の魔法使いだってことを忘れてました)

『レオン様、引き続きこのままお時間、よろしいでしょうか？』

『ん？ ああ、そうだったな、私のためにまた新たな魔法の防具を作ってくれるという話だったな。このまま服を脱げばいいのかい？』

(ぬ、脱ぐ!? お父様が!?)

刺激的な単語に、マリナが息を呑む。

『はい、今度はよりレオン王に密着するものを予定しておりますので、無礼とは存じますが、詳細なお身体の情報を記録したいのです』

『ははは、無礼もなにもないだろう？ お前とはかつてともに旅をし、互いに裸で水浴びもした仲だ、遠慮などいらぬ』

快活に笑うレオンの笑顔に見惚れる一方で、マリナはギュネイに嫉妬を抱く。

(お父様にこんなふうに笑ってもらえるなんて羨ましい……人間のくせに……！)  
映像の中では、アイシャがレオンが服を脱ぐのを手伝い始めていた。

ギュネイに続き、今度は母親までもがマリナの嫉妬の対象となる。

『どうだギュネイ、これでいいのか？』

『はい、そのまま今しばらくじっとしててください』

(こ、こ、これは……ああ、お父様の、お父様の……!!)

上半身裸になったレオンを様々な角度から捉えた映像の数々に、マリナは瞬きもせずに見入った。

エルフ族らしく白く、体毛の薄い肌。

野生の獣を彷彿とさせるしなやかな筋肉。

女のそれとは違いどこかいたいけな小さな乳首。

いくつにも割れた腹筋と、へその窪み。

(ああああ、お父様……あっ)

無論、マリナも幼い頃、父や母とともに湯浴みをした経験がある。父の全裸を、股間にぶら下がるペニスも見ている。

しかしそれはマリナが大人の女となり、また、父に対して背徳的な想いを抱く遙か

以前の話だ。

残念なことに（残念と思う時点でおかしいと気づかないところにマリナの心の闇がある）記憶の中の男性器の姿はぼんやりとしていて、はっきりとは思い出せない。

『では完成を楽しみにしてるぞ、ギュネイ。ああ、もちろん、マリナのことを最優先で頼む』

ここでレオンの声が小声になったのは、アイシャに聞かれないようにするためだろう。

『はい。このギュネイ、必ずやマリナ様をつけ狙う者を捕らえてみせます』

突然流れてきた映像はここで終わっていた。

（えっ。も、もうおしまいなのですか？ お父様のお身体、もっと見せてくださいませっ）

慌てて水晶玉に手をかざしたマリナは、再び父親のセミナード映像が現れたのを見て安堵の表情を浮かべた。



翌朝、マリナは相反する二つの感覚の中で起床した。

(こんなにくっすり眠れたの、いつ以来だったかしら)

一つは、ここ最近すっかり無縁だった熟睡による爽快感。

魔法と思われる襲撃によって何度も命を狙われ続けた結果、マリナはここのところずっと不眠に悩まされていたのだ。

(お父様のおかげ、でしょうか)

だいぶ軽く感じられるようになった肢体を伸ばしながら、水晶玉を愛おしげに撫でる。

その他方、これまでなかった負の面も発生していた。

(イヤですわ。わたくし、なんてはしたくない……)

睡眠中、マリナは何度も父レオンの夢を見たが、その影響だろうか、股間にぬるりとした感触があった。

恐る恐るショーツに手を潜らせると、そこには浅ましい欲望の証が残っていた。

(こんなことを知られたら、わたくし、お父様に軽蔑されてしまいます)

精神的にはまだ幼さも残るとはいえ、マリナももう大人の女だ。年相応に性への知識も興味も、憧れもある。

年齢とともに母アイシャに似てきた若い女体が切なく疼き、強い罪悪感に襲われつつも己の指で肉欲を散らす夜もあった。

(でも……素敵でしたわ、レオンお父様のお身体……はあぁ、思い出すだけでわたくし、わたくし……っ)

爽やかな朝に似つかわしくない艶めかしい吐息を漏らしつつ、水晶玉に手を伸ばすが、王族としての理性とプライドとでかろうじて思い留まり、ベッドから出る。

ナイトウェアの上からでもわかるほどに乳房の先端突起が硬く尖っていることに気づき、美しいエルフ王女はその頬をぽっと赤らめるのだった。

表向きは体調不良による休養となっているマリナは、現在身を寄せているこの貴族の屋敷（普段は別荘として使っているらしい）から出るわけにもいかず、退屈な時間を過ごしていた。

屋敷の主である貴族はレオンの信頼も厚い人物で安全面では問題ないものの、若い娘にとって退屈は相当な苦痛だ。

もちろん、何者かに命を狙われてる以上、暇を嘆くのは贅沢だとわかっている。

「ギユネイ、わたくしを襲ってきた者の見当はつきましたか？」

だからマリナは昼食後、状況の確認という名目でギユネイを呼び出した。

ギユネイを急かして一日でも早く事態を收拾させて公務に戻るのが最善だが、たとえそれが難しくとも、この人間の魔術師からレオンの昔話を聞くのも悪くない、と思ったからだ。

「申し訳ございません。すでにいくつか手を打ってはございますが、報告するに値する結果はまだ出ておりません」

ギユネイは深々と頭を下げて謝罪する。

「いえ、昨日の今日で結果を求めたわたくしも性急すぎました」

「そう言っていたいただけると助かります。ただ、一つだけ明るい報告もございます」

「それは？」

「実は昨夜のうちにこの敷地内に魔法による防壁を設置しました。先程確認してきたところ、攻撃を受けた形跡が見つかったのです」

ギユネイの説明によると、やはりマリナを狙った攻撃は魔法によるものだったという。

「これで賊の魔法の特性が判明しましたので、今度はこちらから反撃いたします」

魔法にはあまり明るくないマリナにギユネイは丁寧に、噛み砕いて説明してくれたおかげで、だいたいのことは理解できた。

「なるほど。相手の攻撃を防御しつつ、今度はその魔法の痕跡を辿ってこちらから迎え撃つ、というわけですね。さすが我が国の軍師、そしてお父様の右腕と呼ばれる男です、ギユネイ」

ギユネイに対しては相変わらず生理的に受け付けがたい感情はあるものの、客観的には非の打ち所のない有能な臣下だ。少なくとも、王女としてのマリナはそのようにギユネイを評価している。

エルフではない点は確かに気になるが、妹のミリスのように頭から人間族を毛嫌いしてもいいない。

マリナも昔はエルフ以外の種族を下に見るところがあったが、親善大使として各地を周り、多種多様な文化や価値観に触れたことで徐々にそういった差別意識は消えていったのだ。

(でも、それでも、ギユネイに対してだけは心を許してはならない、そんな気がするのはどうしてなのかしら?)

今後の警備体制についての説明をするギユネイを眺めながらマリナは考える。

(確かに外見はあまり優雅とは言い難いけれども)

人間としても低い身長。

そのくせ、剣士と見紛うほどに鍛え上げられた筋骨隆々の肉体。

見事に剃り上げられた頭部。

眼光鋭い瞳。

酷薄そうな唇。

そして、全身を覆う黒ずくめのローブ。

たとえ物腰が丁寧であっても、ギユネイの全身から感じるのはどこか不気味な、不吉な印象が強い。

(そういえば以前、わたくしやミスが高熱を出したとき、この男に助けられたこともありましたね)

今から考えれば熱の原因を調べるためだったのかもしれないと思えるが、当時は自分たちを凝視する他種族の中年男におぞましさを覚えたことを思い出す。

(あるいは、あれがわたくしの、ギユネイに対する悪い印象のきっかけかもしれません)

そんなふうに分心自分の心を分析してみても、やはり目の前の魔術師に対する警戒心はなかなか薄れない。

「……さて、報告は以上ですが、なにか疑問などがありますか？」

「ここにいれば安全、という点は信頼しましょう。しかし、わたくしもいつまでも隠れているわけにはまいりません。一刻も早く公務に復帰したいのです。あとどのくらい待ってれば賊を捕らえられるのです?」

「無論、私としても全力で取り組む所存でございますが、いついつまで、と確約はできません」

マリナの端正な顔に落胆が浮かぶ。

「ですが、三十日後にはすべてを解決できると考えております」

「え、三十日後?」

が、落胆はすぐに驚きに変わる。マリナが考えていたよりもずっと早い見通しだったからだ。

長寿のエルフにとって、三十日程度はそう大した時間ではない。

「実はレオン王に、三十日以内に解決して帰国しろと厳命されているのです。あの方は昔から私に無茶をおっしゃいます」

ここでギュネイは初めて、笑みを見せた。

薄い唇を少し歪めただけだったが、それは確かに笑みと呼べる表情だった。

(この男、こんなふうには笑うのですね)

ギユネイがやって来てから、それまでの息が詰まるような退屈な生活はだいぶ改善された。少なくとも、屋敷で一日中、物憂げな表情でため息ばかり漏らす生活ではなくなった。

ギユネイの張ってくれた結界のおかげか、あれほど頻発していた攻撃はもう一度もない。

敵の正体を探る調査も着々と進んでいるという報告に、沈みがちだったマリナの顔は日に日に明るさを取り戻しつつあった。

姿の见えない敵から命を狙われる心配がなくなったことに加え、ギユネイから聞くレオン王の昔話もマリナの心を軽くしてくれた。

「お父様、そんなことはわたくしには一言も教えてくれませんでしたわ」

「私の口から言ったことは是非ご内密にお願いいたします、マリナ様」

「ええ、わかってます。内緒にしておかないと、もうお父様のお話、してくれないのでしょう？」

実際にともに旅をしたギユネイの口から直接語られる父親の姿は、マリナにとって新鮮な発見の連続だった。

「ねえギユネイ、こういうお話、お母様も知っておられるのかしら？」

「レオン様はあまり積極的にご自分のことを語りませんから、恐らくはアイシャ様も

知らないかと」

「そう。ふうん。そうなの」

勝手に緩む口元をティーカップで隠しながら、マリナは母親に対して優越感を覚えていた。

(お母様も知らないお父様のことを、わたくしは知っているんですのね)

ギユネイは極力レオンのエピソードのみを選んでくれていたようだったが、それでもときおりこの人間の魔術師の話も出てきた。

自分のことはだいたい控えめに話しているつもりなのだろうが、それでも充分にギユネイの能力の高さを窺い知れた。

(伊達にお父様の右腕と呼ばれていないのですね)

もっとも、だからといってギユネイに対する警戒感がなくなったわけではないのだが。

「ああ、もうこんな時間ですね。私は結界に問題がないかももう一度見て回ってまいります。マリナ様もそろそろお部屋にお戻りくださいませ」

懐中時計を取り出したギユネイが音もなく客間の椅子から立ち上がる。確かに、もうだいたい遅い時刻だった。

夕食後、こうしてギユネイから話を聞くのがすっかり習慣になっていた。



「ええ、そうですね。ではギュネイ、あとはよろしく頼みましたよ」

「はっ」

腰を直角に折るギュネイに背を向け、マリナは優雅な足取りで自室へと向かう。

このとき、一度でも振り返ってみれば己に向けられた野獣のような視線に気づいただろうが、清純なエルフの乙女は真っ直ぐに前を向いていたため、ギュネイの禍々しい目を見ることはなかった。

(ダメ………こんなのいけないことなのに………ああ、またわたくし、こんなはしたない真似を………あっ………あああっ)

清純なエルフの王女は、ギュネイと別れた直後、自室でその肢体を悩ましくくねらせていた。

命の危険から解放され、許されない想いを寄せる父の様々な昔話を聞かされた処女は、それまでの禁欲的な生活の反動で毎晩、淫らな独り遊びに耽るようになっていた。

「はっ、はっ、はっ………お父様………お父様………ア」

枕に顔を埋め、漏れ出る声を押し殺しながら秘裂をまさぐる王女の視線の先には、血の繋がった父レオンの半裸身を映す水晶玉があった。

「お父、様……はあぁっ、ンッ、ンッ、見ないでくださいませ……こんな親不孝な娘でごめんなさい……んあぁッ！」

これまでも自慰行為の経験はあった。父を思い浮かべながらしたこと数多い。だが、ここまで明白に、露骨にレオンをオカズにしてよがった経験はなかった。

（ギユネイがいけないのです、わたくしにこのような不埒なものを見せるから……アッ、来る、来てしまいますッ、お腹の奥がきゅうんってなりますッ！）

水晶の中で微笑みながら半裸を見せる父親はまさか、これを使って自分の娘がオナニーしているなどは夢にも思っていないだろう。

もしこんな事実を父親に知られたら生きていけない、と絶望すると同時に、そんな破局的な想像によって穢れない処女穴から淫らな汁が新たに分泌されてくる。

（どうして、どうしてわたくし……アアッ、違いますの、わたくしは、わたくしは……アアッ、お父様……レオンお父様、お許しを……罰当たりなマリナでごめんなさい……アッ……アアアア！）

父に対する罪悪感に比例して快樂の甘さが増すことを、マリナは己の女体でもって知ってしまった。

知ってしまったがゆえに、抜け出せない。

「ふっ、ふっ、ふうふううーっ！　ンンン、ひゃめ、ここ、じんじん、しひれて……

んひっ、来ふ、来ひゃふウン！」

噛み締めた枕に涎を染みこませながら、俯せオナニーに興じる王女は尻を徐々に持ち上げていく。

透明な蜜に濡れた細い指が忙しく蠢き、男を知らないクレヴァスを何度も何度も上下する。

柔らかなフードに半分埋もれていた肉真珠もぷっくりと膨らみ、指で擦られるたびにマリナに艶めかしい声を上げさせる。

(ここ、ここが一番イイッ……お父様、お許しを……お父様を見つめながら、はしたなく果てようとするわたくしをどうか、どうか……アア……来ます、来ちゃいますのお！ んひっ……ンアアアッ!!)

ぎりぎりとお枕に歯を立ててアクメ声を懸命に押し殺しつつ、ファザゴンエルフは絶頂した。

(あっ……気持ち、イイ……お父様の前で恥を搔くの、たまりません……ッ)

水晶に映る父を見つめるマリナの瞳から随喜による涙が溢れ、紅潮した頬をゆっくと濡らす。

「ハア……ハア……ハア……」

徐々に去って行くオルガスムスの波を惜しむように小刻みに震える女体を、ベッド

の傍らに置かれたもう一つの水晶玉だけが静かに見つめ続けていた。

昏い野望を抱く人間の魔術師ギユネイは、彼に与えられた屋敷の一室で、水晶玉に映る映像を食い入るように見つめていた。

(思ってた以上の反応です。これなら、予定を早めてもよさそうですね)

敵の見えない攻撃を防ぐ名目でマリナに渡した水晶玉には、映像の記録及び転送のための特殊な魔法がかけてある。

レオンの姿を記録したものと同じ系統のテクニクで、マリナの母親アイシャを姦計で嵌めた際にも駆使した、ギユネイ独自の高等魔法だ。

(しかし、マリナ様がレオン王に父親以上の感情を持ってるのは承知してましたが、ここまでとは……)

幼い頃にまだ独身だったアイシャに一目惚れし、時間とともにその愛欲を歪ませていったギユネイにとって、マリナは絶対に外せない獲物だった。

もちろん、この魔術師が最も執着しているのはアイシャであるが、その二人の娘、長女マリナ、次女ミリスにも同等の想いと欲望を抱いている。

アイシャとミリスはすでに彼の魔手によって穢され、墮とされた。

残るはこのマリナだけだ。

(アイシャ様によく似ているとは思っていましたが、果てるときの切なげなお顔などもそっくりですね。ふふふ……たまりせん。私の愚息がマリナ様のその狭い穴に潜りたがってしまおうではありませんか)

ギユネイの股間のローブが禍々しく持ち上がる。

貞淑な人妻であり優しい母親であった王妃アイシャを、活発で淡い恋をしていた王女ミリスを残酷に貫いた凶悪なペニスが早くもエレクトトし始めていた。

(では、明日にでも作戦を決行するとしますか。……待ってなさい、すぐにあなたの出番ですよ)

まるで十代の頃のように激しく脈打つ己の相棒をまさぐりながら、狡猾な中年男は片側だけ唇を持ち上げ、歪な笑みを浮かべた。

食後の茶の香りを楽しんでいたとき、マリナはふと、目の前で同じようにティーカップを持った黒ずくめの男に視線を向けた。

（そういえば、こうしてギュネイと二人きりでお茶を飲むことに疑問を抱かなくなってますね、いつの間にか）

レオンから秘密裏にマリナの警護を命じられた人間の魔術師は、今日もいつもの黒いローブに身を包み、静かに茶を飲んでいる。

マリナが身を寄せるこの屋敷にギュネイが来てから十日が経つが、この間、確かに正体不明の敵による攻撃はなくなった。

（あとは相手の正体が突き止められれば、すぐにでも公務に復帰できるのに）

王女としてのマリナは強くそう願う。だが反面、一人の少女としてのマリナは、この退屈ではあるが穏やかな日々がもう少しだけ続いてくれればいい、とも密かに考えていた。

そう思う理由の中に、ギュネイが話ってくれる父レオンの昔話が占める割合は極めて大きい。

毎日、短くない時間をギュネイの話を書くことに割り当てているのに、まだまだ語られてないエピソードがあるらしい。

(それだけ長い冒険をしてらしたのですね、お父様は。さすがですわ)

ファザコン王女の希望を汲み取ってだろう、ギュネイはマリナが言わずとも、レオンが中心の話ばかりしてくれた。

意外なことにギュネイの語りはなかなかのもので、おかげでマリナは敬愛する父親の血湧き肉躍る冒険譚よりのめり込むことができた。

(忘れがちだけれど、この人間、普段は政治の中心にいるのだから、弁が立つのは当たり前なのかもしれません)

建前上はエルフ以外の種族にも平等な権利が与えられている母国だが、少数派である人間の肩身が狭いのは間違いない。

しかも魔術師というのは忌み嫌われることも多く、いくら王のかつての戦友とはいえ、ギュネイが今の地位を築くためには相当な困難があったことは容易に想像できる。(たとえ相手が人間の魔術師であろうとも、その能力を平等に評価するレオンお父様は、やはり最高ですわ)

最終的には敬愛する父の話題に思考が戻るのが、いかにもファザコン王女であったが。

「さてマリナ様、今夜はどのようなお話をいたしましたでしょうか」

敵の追跡調査の中間報告を簡潔に済ませたギュネイが、その低い声で尋ねてくる。

「そうですね……今日もお父様の大切なお仲間について聞いてみたいですね。昨日のお話、とても面白かったから」

「なるほど。では、今夜は誰になさいますか？」

「あなたがいいわ、ギュネイ」

この返事は予想外だったらしく、ギュネイが珍しく驚いたように眉を動かすのが見えた。

「……私のような者の話など、きくとマリナ様は退屈なさります」

「そんなことはありません。そうですね……ああ、だったらギュネイ、あなたの恋愛に関する話を聞かせてちょうだい」

マリナのこの言葉に他意はなかった。

たまたま昨晩聞かされたのが、パーティーの一人が冒険の途中で運命的な恋の出会いをした、という内容だったからだ。

このエピソードは比較的有名で戯曲にもなっているが、実際にその場にいたギュネイから語られる迫力に、マリナはすっかり引き込まれたのだ。

「私ごときに語れるような色恋の話はそうありませんが……では、少しだけ、マリナ



様のお耳を汚すといたしましうか」

(え？ え？ これって……これってまさか……？)

ギュネイの語り出した彼の昔話に耳を傾けていたマリナは、途中でとある疑念を抱いた。

子供の頃に見かけた美しい異国の姫に恋をした少年の頃のギュネイ。

その姫に近づくために身体を鍛え、魔法の修練をした若き日々。

だがその初恋は叶わず、異国の姫は自分とは比べものにならないほど美しい別の男と結ばれてしまう。

ここで終わっていれば、切なくはあるが美しくもある悲恋物語で済んだだろう。けれど、ギュネイの語りはまだ続きがあった。

(ううん、そんなはずはないわ。だって、だってこれが事実だったら……)

姫への想いを諦めきれない少年、否、大人になったギュネイは本心を押し殺して恋敵の軍門に降り、長い年月をかけて信頼を得ると、ついにそのねじ曲がった想いを姫に、このときには妻となり、二人の娘となった王妃にぶつけたという。

「おや、どうかされましたかマリナ様？ 顔色が優れませんよ？」

「……ギユネイ、それは……どこまでが本当の話なのです？」

「マリナ様はどこまでが本当だと思われましたか？」

それまで表情を変えずに喋り続けていたギユネイが小さく笑うのがわかった。

（ああ、やっぱり作り話だったのですね。よかった……）

安堵できたのはほんの一瞬だけだった。

「すべて、実話でございます。それも、現在進行形の」

「な……なにを……なにを言っているのですギユネイ。冗談にしても質が悪すぎますよっ」

「私は冗談を口にするような男ではございません」

「……！」

身の危険を感じたマリナは、咄嗟に老執事を呼ぶ鈴に手を伸ばす。

「マリナ様にご覧いただきたいものがここに」

それを見てもギユネイは慌てることもなく、テーブルの上に静かに水晶玉を置いた。

マリナが毎晩のように眺めているものでも、ベッドサイドに設置してあるものとも

違う水晶のようだった。

「私の話などよりもずっとずっと刺激的なものがここに収められておりますよ？」

ギユネイが何事かをつぶやくと、水晶に映像が映し出された。

半ば条件反射で覗き込んだマリナの瞳に飛びこんできたのは父レオンの姿などではなく、完全に予想外の、そして最悪の光景だった。

『はっ、はっ、はっ……お父様……お父様……ア』

見慣れた寝室のベッドの上で俯せになってはしたない独り遊びに興じている少女は、まさにマリナ自身だった。

しかも水晶玉からは発情した女の声が腹立たしいほどクリアに響いてくる。

「おっおやめなさいギユネイ！」

驚愕と羞恥と汚辱とに長い耳を真っ赤にしながらもマリナは咄嗟に水晶を奪おうとするが、ギユネイは簡単にその伸ばされた手を押し返す。

「そのご様子では、ここに映っている方が誰か、説明は不要ですね」

淡々とギユネイが話すあいだも映像と音声は部屋に流れ続ける。

『お父、様……はああっ、ンッ、ンッ、見ないでくださいませ……こんな親不孝な娘でごめんなさい……んああっ！』

生まれて初めて聞く自分の声はまるで他人のようだったが、水晶の中で淫らに悶える姿と、肉悦に震える喘ぎの内容から、否定の余地はまったくなかった。

「とっ止めなさいっ……これ以上は……おやめなさい、ギユネイ！」

「おや、あと少しでマリナ様が女の悦びを極められるところなのですが、よろしいで

すか？」

「っ!!」

このセリフの裏側には、ギユネイがもう何度もマリナの絶頂シーンを見たという事実が潜んでいる。

「破廉恥な……恥を知らなさい人間ッ」

「破廉恥？ ふふふふ、破廉恥ですか」

「なにを笑うのです、無礼者！」

「いえいえ、まさかここで破廉恥というお言葉がマリナ様自身から飛び出すとはこの私もまったく想定してませんでしたので、驚いておりました」

ギユネイはそう言うのと水晶を軽く持ち上げ、いまだに流れ続ける恥辱の映像と音声をマリナに向けた。

水晶の中ではまさにこれから処女姫がオナニーアクメを迎えようとするところだった。

『ふっ、ふっ、ふうふうーっ！　ンンン、ひゃめ、ここ、じんじん、しひれて……んひっ、来ふ、来ひゃふウン！』

「ギユネイ、早く、早くそれを止めるのです！　これは、これは命令です！」

悔しさと恥ずかしさに涙ぐみながらも、マリナは王族の者らしく命じた。命じたつ

もりだった。

「承知しました、マリナ様」

「……え？」

ここでギュネイは突然、素直にマリナの指示に従い、隠し撮りの映像再生を止めた。水晶が元の姿に戻った途端、室内には夜の静けさで満たされる。

「私は権謀術数を得意とはしてありますが、性格的には実は面倒ごとが嫌いなので  
す」

「なにを……なにを言ってるのです？」

「ですから、単刀直入に申し上げます。マリナ様、私の欲望の捌け口となってください  
い」

考えるより先に身体が動いていた。

マリナの手のひらが、卑劣な魔術師の頬を叩いていた。

「恥を知りなさい！ こんな真似をして許されるとでも思ってるのですか！」

「そうですね、お父上に知られたら死罪、よくても国外追放といったところですか」  
平手打ちを食らった頬をどこか嬉しげに撫でるギュネイに慌てた様子は一切窺えない。  
い。

「私がかまわないのです。どうせもう人生の半分は過ぎました。私の本願もほぼ叶い

ましたし、今さら死んでもそう悔いは残りません」

対照的に、マリナの表情はかなり険しい。自分の置かれた状況の厳しさを理解しているからだ。

「い、いいですわ、お父様にはわたくしの口から直接伝えますから、あなたは今すぐここから出てお行きなさい。これまでの功績に免じて、命だけは見逃してあげましょう」

内心の脅えを必死に隠しながら最後通牒を突きつけるが、若いエルフの虚勢が通じるほど、この歴戦の魔術師は甘くなかった。

「私はレオン王に告げられてもまったくかまいませんよ、マリナ様。堂々と、すべてをあの方にお伝えいたしましょう」

「ギユネイっ！」

「ふふふ、レオン様も驚かれることでしょう。まさかご自分の、血の繋がった可愛い娘が父の姿を愛でながらはしたなく股をまさぐり、あまつさえ絶頂まで迎えてしまったのですから」

言葉遣いこそ丁寧だが、そのねちねちと、心と身体にまわりつくような不快なセリフにマリナは絶望した。自分に勝ち目はないと悟ってしまった。

「……………あ、あなたの……………あなたの狙いはなんなのです」

囁くような細かい声は、気高い王女が敗北を認めた証だった。

(しかたないので……だって、だってわたくしの許されない想いがお父様に知られてしまったら生きてられません……お父様にもご迷惑が……)

目の前の卑劣な男の狙いは自分だと、この身体だとわかつている。

(どうせいずれは国のため、お父様のために誰かに嫁ぐ身です、それが少しだけ早くなるだけのこと……そう、それだけのことよ……!)

妹のミリスと異なり、長女である以上、自由な恋愛ができるとはマリナも思っていない。

だが、優しい父ならばきっと素敵な相手を見つけてくれるとも信じていた。

(堪えるのですマリナ。わたくしは英雄王レオンの娘。エルフ王国の王女。たかが百年も生きられない人間の相手くらい、ちょっと犬に手を噛まれた程度のことです)

かたかたと震える肩を悟られまいとマリナは自分の身体をぎゅっと抱き締める。

それは無意識の行動だったが、胸の膨らみを目の前の憎むべき悪漢に強調して見せる結果となる。

ギユネイの視線を母譲りの豊かなバストに感じ、マリナはそのおぞましさに青ざめる。が、組んだ腕を解こうとしなかったのは、王女としての矜持だけは守り通したかったからだ。

「なるほど、さすがはマリナ様です。この絶望的な状況下でもまだ気高さを保っておられるとは、やはりあなたはレオン王の、そしてアイシャ様の娘です」

マリナよりも頭一つ、いやそれ以上に小柄な黒き魔術師がゆっくりと近づいてくる。「それでは私の要求を申し上げます。私にそのお美しい身体を差し出してもらいますよう」

「……！」

わかっていたし覚悟もしていたが、実際に言葉にされると泣きたくなるほどのショックだった。

「いかがです？ 期限は……そうですね、私が国に戻るまでのあいだで結構です」  
「？」

これは想定外だったので少し驚いたが、マリナにしてみれば最悪の事態、すなわち永遠にギユネイの慰み者にされるといふケースを回避できるのだから、悪くない提案だ。ギユネイが約束を守るかはまた別問題だが。

「わ、わたくしからもあなたに条件があります」

「ほう？ この状況で私と交渉しようとおっしゃるのですか？ 興味深いですね、内容次第によっては検討いたします」

ありったけの勇気を振り絞って出した条件をギユネイはしばし考えたのち、受け入



れてくれた。

「いいでしょう、その契約を受け入れます」

こちらの条件が通った安堵感よりも、ここでギュネイが初めて使った「契約」という言葉の重さに、マリナは改めて絶望を覚えるのだった。

(唇も純潔も奪わないで欲しい、ですか。いかにも処女のお姫様らしい提案ですね)

マリナから出された二つの条件は、普通に考えればギュネイの狙いにとって大きな障害となるものだ。しかし黒衣の魔術師はそれほど悩まずにマリナの提案を受諾した。そこにはギュネイなりの狙いもある。

まず、マリナにとってなによりも大切な唇と処女だけは穢さないと約束することで、これから行う調教をスムーズに進められる。

また、この条件を受け入れることで、マリナも納得した上で契約を結んだのだと思わせられる効果も期待できる。

(マリナ様はもうお気づきのようですね。あなたは私に釘を刺したと同時に、ご自分にも枷を嵌めたのです。あなたがすべきだったのは条件など提案せず、最後まで私の要求を突っぱねることだったのです)

自らギユネイの用意したステージに上がってしまったマリナは、予想どおりに急に大人しくなった。

命じられるまま寢室へとギユネイを案内し、毎夜独り遊びに興じていたベッドに横たわる。

「約束は……守りなさい、ギユネイ」

「ええ、このギユネイ、残り少ない命に誓いましょう」

ドレス姿の王女はベッドの上で仰向けになると、強く目を閉じた。あとは好きにしろ、という意味表示らしい。唇とヴァージンを守るならば、それ以外はどうか堪えられると考えてるのだろう。

（その思い切りのよさには感嘆いたしますが、閨の奥深さを知らないからこそ、でもありますね）

ギユネイがマリナの条件を呑んだのは、キスや膣への挿入などなくとも、この美しく気高い王女を性の底なし沼に沈められる絶対の自信があったからこそだ。

マリナの母アイシャ、妹のミリスをすでに淫欲の世界に引きずり込んだ経験も、ギユネイを強気にさせる。

「しかし、こうして見ると本当にお美しい……」

「……ッ」

目を瞑ったままのマリナの長く尖った耳元で囁きつつ、毛穴の一つも見えない頬をそっと撫でる。

「あなたの母上、私の人生を変えてしまったエルフの至宝、アイシャ様とよく似ていらっしやる」

ギユネイは敢えて、胸や股間といった、乙女が最も警戒するであろうポイントには触れず、頬や顎、首筋、耳、二の腕、肘の内側、そしてスカートとオーバーニーソックスとが形作る絶対領域に指を這わせていった。

「け、穢らわしい……っ」

マリナもいくらかの快感は得ているようだが、ギユネイへの嫌悪感のほうが遙かに大きいのだろう、このベッドで毎夜上げていたような甘い声は引き出せない。

もっとも、ギユネイは愛撫のつもりでやっていたわけではないのだから、焦ったりはしない。このタッチは純粹に、マリナの女体を確認するための行為だ。

（ふむ、感度はなかなかいいようですね。経験はなくても毎晩自慰に耽るくらいですから、処女のわりにはそこそこ成熟も進んでいるでしょう）

ギユネイの下腹部ではアイシャとミリスを犯した怒張が早くも反り返りローブを持ち上げている。

（まあ、あとは実際に見て、触れてみなければ詳しいことはわかりませんね）

ギユネイは纏っていたローブを脱ぎ捨てる、憐れな贅のいるベッドに上がった。

「ひ……っ！」

身をすくめる王女に対して容赦なくドレスをはだけ、ショーツを奪い取って、まだ誰にも見せたことのないであろう白い乳房と清純な秘所を剥き出しにする。

「イヤ……イヤ、イヤァ！ おやめなさい、やめるのですギユネイ！」

「今さら契約を破棄しようとしても無駄ですよ。なに、私も約束は守ります。マリナ様のその柔らかかそうな唇も、この股ぐらにあるもう一つの唇も、決してその純潔を奪ったりはいたしません」

興奮で僅かに上擦った声でそう告げると、ギユネイはいきなりマリナの乳首に吸いついた。

「やっ、イヤ……おやめなさい……ダメ……こっこの無礼者……アアッ！」

マリナは胸に顔を埋めたギユネイを必死に押し返そうとする。

だがギユネイはそのか細い、ちょっと力を込めれば簡単に折れてしまいそうな手首を逆にベッドに押しつけて反撃を封じると、より強く先端突起を吸った。

「あああっ、イヤです、こんなのイヤ……ああっ、お父様、レオンお父様あ！」

マリナは叫びながら身をよじっておぞましい責めからの脱出を試みるが、その抵抗はあまりに心許なかった。

身長こそギュネイより高いマリナも、横幅はギュネイの半分程度しかない。

肉体労働などとは無縁の王女と、分厚い筋肉と骨格を持つギュネイとでは悲しいほどに力の差があった。

(いいですよ、実にいいです。もっとも抗ってください。あなたがそうやって暴れば暴れるほどに甘い汗の匂いが強くなります)

性的な悦びにはまだまだ遠いはずだが、それでも激しく吸引され、舌をねちちこく這わされた乳首が徐々に体積と硬度を増してくる。

同時に、若い肌にはじわじわと汗の珠が浮かび上がり、残忍な凌辱者の歪んだ肉欲をさらに高めてしまう。

(アイシャ様とミリス様、お二人の特徴を足して割ったような、上品さと甘酸っぱさを兼ね備えた匂いですね。素晴らしい。この匂いを嗅いで、甘い汗を舐めるだけでたまらなくなりますよ……！)

中年男のしつこく、粘着質な乳首責めの前に、マリナの抵抗が僅かに弱まった。いくら抗っても無駄だと諦めたらしい。

快楽に屈したわけではないのは、その挑みかかるような鋭い眼光が如実に物語っていた。

「マリナ様の乳房、堪能させていただきました。この世のものとは思えぬほどの甘露

「ごさいました」

「こ、これで気が済んだでしょう。さっさとわたくしの上からおどきなさいっ」

「はははは、ご冗談を。こんなものはただのご挨拶、前座に過ぎませんよ？」

「な……なんですって？……きゃあっ！」

ギユネイはマリナの両脚を力任せにM字に開かせると、その剥き出しの股間に顔面を埋め、大きな音を立てながら息を吸った。

「はあああぁっ、これが、これがマリナ様のオマ×コの匂い、なのですね」

卑語を用いて感想を口にしたのは、高貴なエルフの王女の心を抉るためだ。

当然、マリナは乳房のとき以上の抵抗を見せるが、結果は変わらない。

逆に激しく動いたせいでさらに大量の汗をかき、より濃厚なフレグランスをギユネイに嗅がせることとなる。

「思っていたよりも匂いはキツくないのですね。処女のマ×コは独特の匂いがあるものですが。……ああ、そうでした、マリナ様は夜ごとご自分でここを、このワレメとお豆をまさぐっておいででしたね」

「お、お黙りなさいギユネイ！ これ以上わたくしを愚弄するような発言は許しません！」

怒りと恥辱に真っ赤にしたマリナの顔をちらりと確認したのち、ギユネイはゆっくり

りと舌を伸ばし、れろれろと上下に動かした。マリナに見せつけるのが狙いだ。

「ひい!? まさか……あなたまさか……」

「ご安心ください、約束は守ります。マリナ様の大切な純潔は決して奪いません」

「と、当然です! でも、でも……ひゃっ……ひゃあああっ!!」

たっぷりと唾液を乗せた舌が慎ましやかな肉羽を這った瞬間、マリナの腰が跳ね上がり、ギユネイの顔面に無毛の土手が接触する。

「ほう、本当につるつるなのですね。こちらの膨らみはすっかり大人の女性だというのに」

ギユネイは両手で柔乳を揉み始めると同時に、見事なまでに滑らかな恥丘に頬ずりをする。

「やめ、やめなさっ……あああっ!」

「なるほど、大きさはそう変わらなくとも、弾力がまるで違うのですね。こちらのワレメも、毛が生えてないのは一緒でも、ビラビラの形が微妙に異なります」

ギユネイのそれは独り言を装った、マリナへの揺さぶりだった。

乳房のサイズと柔らかさ、天然パイパンや小陰唇の形状の差異を口にするので、マリナに母や妹の存在を連想させるのが狙いだ。

自分はすでにアイシャとミリスも籠絡したのだと思わせることで、抵抗しても無駄

だと暗に伝える。

(しかし、無毛である点こそミス様と同じですが、全体的にはやはりアイシャ様とよく似ていらっしゃる)

卑劣な手を使って墮とした王妃の若かりし頃はきっと今のマリナそっくりだったのだらうと思うと、四十歳をとうに超した男の股間が十代のように熱くなる。

(アイシャ様のは奪えなかったが、娘のマリナ様の初めては私がちょうだいさせていただこう)

歪んだ愛欲のままにギュネイは憧れの女性の娘を責めていく。

強弱をつけて豊かな胸乳を揉みしだき、ぴんと尖った先端の蕾をつまみ、こね回す。左右対称の美しい縦割れに沿って尖らせた舌を這わせ、ときおり肉莖の上からクリトリスをつつき、また、蜜穴を軽くほじる動きも見せてやる。

「ふっ、ふっ、くっふ……んふ……ッ」

マリナの抵抗も、時間の経過とともに弱々しいものへとなってきた。

「ああ、イヤっ、なにをなさるの……こ、こんなのおかしいです、ああ……くう……もうやめなさい……今なら、今ならまだわたくしも寛大な心で……えっ！」

(感度も素晴らしいですが、ここ最近いじり続けたせい、身体が勝手に反応してしまふようですね)



父親の半裸という絶好のオカズを与えられたファザコン王女の肢体は、毎晩のオナニーによって相当に鋭敏になっていた。

執拗に揉まれた乳房は汗で妖しく輝き、その頂点では淡いピンクの尖りが卑猥に自己主張をしている。

延々と舐められた姫割れは唾液や汗とは別の体液に濡れ、二枚の肉貝は徐々に左右へと捲れつつあった。

「違うのです……ああ、違うのですギュネイ……わたくしは、わたくしは決してあなたの方の思ってるようなはしたない女では……はあん！」

「私はまだなにも言っておりませんが？」

舌先で勃起クリトリスを転がしながら、涙で濡れたマリナの瞳を見つめる。

「い、言わなくともわかります……あ、あなたのその……ンン……わたくしを見下すような……蔑むような視線で……んああっ やっ、イヤ、イヤですの、そこばかり舐めるのはおやめなさ……ヒィーッ！」

びくん、と腰が震えたのは、ついに憎むべき男のペッティングで処女姫が達した証拠だった。

(マリナ様のイキ顔、しっかりと拝ませていただきましたよ。アイシャ様とよく似た、実に男を滾らせるお顔でした)

ターゲットのアクメを目と舌で確認しても、ギュネイの責めは止まらなかつた。むしろここからが本番とばかりに、絶頂中のエルフに容赦ない追い打ちをかける。

勃起乳首を少し強めにひねり、ぷくんと膨らんだ陰核を唇で軽く挟むのを繰り返す。量と濃度を増した愛液を掻き分けるように舌を膣穴に潜らせ、自分の指しか触れたことのない女の粘膜を舐め回す。

「ヒイッ、ヒイッ、イッヒイイッ！　ま、待ちな、さいっ……わた、わたくしは今、今は……アアッ、今は許してっ……お願い、待ってギュネイ……ああ、また、またわたくし……アッ……アッ!!」

最初のオルガスムスが引ききる前に、第二波を食らわせることに成功した。

先程の絶頂よりも明らかに深く、甘く、鋭い愉悦に、マリナの腰がベッドから高々と浮き上がる。

「くうっ……うっ……イヤ……こんなっ……知らない……わたくし、どうしてこんな……アアッ、知りません……知りませんのに……い！」

オナニーでは無意識のうちに自分でブレーキをかけてしまうため、こうした連続絶頂はなかなか経験できない。

「この程度で音を上げていたら大変ですよ、マリナ様」

本来ならばここで肉棒をこの蕩けつつある膣穴にねじ込みたいところだったが、唇

と処女は奪わないという契約があるため、ギュネイの底なしの獣欲は別の器官へと向けられた。

「え……ふぁ？ あなた、なにを……どこを……ひゃううっ！」

連続オルガで半ば飛びかけていた意識を一気に現実に戻したのは、女の股ぐらにある別の狭穴だった。

たっぷりと唾液を塗布した小指の先端でアヌスを軽くつつくだけで、マリナは面白ようにその肢体を震わせ、悲鳴じみた声を響かせた。

「んひっ、ひっ、ひうっ！ よしな、さいっ、ギュネイ、そこは、そこは許しまっ……ひゃううう！」

「おや、でも私はマリナ様との約束をしっかりと守っておりますよ？ この尻穴、いえ、ケツマ×コに關しての契約条項はなかったはずでございますが？」

「ケ……!？」

生まれてから一度も口にしたことも、耳にしたこともない猥褻すぎる卑語にショックを受けている隙に、ギュネイは第一関節まで指を埋めた。

「んあああっ！ ぬ、抜きなさい、こ、これ以上の不埒な真似は、真似はあ！ ははおォッ！」

不浄の穴をほじられるという行為は、穢れを知らない処女にとっては悪夢以外のな

にもものでもなかつただろう。

だが、ギユネイは困惑と絶望に泣き濡れる美しいエルフへ更なる責め苦を与える。

「くあああつ！ アアツ、アツ、ダメ、ダメ、今は、ダメえっ！」

小指の先端をアヌスに埋めた状態のまま、ギユネイは三度、乳首やクリトリス、女陰への愛撫を繰り返したのだ。

すでに二度の連続オルガを与えられていた若い女体は、肛門に異物を刺された状態であろうとも容易に牝悦への飛翔を開始してしまう。

(さあ、この美しいお身体に、一生消せないほどの快楽を教えて差し上げます。あなたがたの見下している人間の、醜い中年男によって与えられる未知の世界を、たっぷり堪能してください)

すっかりコントロールを失った己の女体に翻弄されるマリナの蕩け始めた顔を視姦しつつ、ギユネイは軽く指を振って直腸にも刺激を送る。

「イヤ、イヤ、イヤッ！ 抜きなさいっ、いけません、そこは違うのですう！ くっ、ふっ、ンンンン……んあアツ、もうイヤです、こんなふうに果てるのはイヤァ！」

憐れな姫が三度目の絶頂に痙攣する寸前、ギユネイはクリトリスを甘噛みすると同時に、アヌスに小指を根元まで挿入した。

「あっひい!? アツ……アツ……アッ……アッ……アアアアッ!!」



無毛のワレメから淫汗を噴き出しながら望まぬオルガスムスに悶絶するマリナに、  
ギユネイは満足げに目を細めるのだった。